芭蕉元禾集

全

へ5
4425

門 へ 5
4425
巻
へ5
4425

芭蕉之末葉

全

昭和九年
九月二五日
購求

芭蕉桃青翁之墓記

芭蕉桃青翁ハ伊賀國阿閉郡柘植村ニ赤坂氏ノ子トシテ生レ
ナガラ父ヲ松尾儀兵衛ト云ヒ母ヲ諏訪宮和泉ノ娘桃花氏
乃姉ナル故ヲ以テ幼ニシテ松尾氏ニ養ハレ上野赤坂町ニ住シテ
沼沢水竜ニ俳諧ヲ學ビ後ニ江戸ニ出テ深川芭蕉庵ニ
住シ又半七ヶ年ノ修行ヲ經テ一家ヲ成シ門人數百人
アリ嗚呼ト雖モ元祿甲申年ノ冬ヲ以テ
後ノ半七ヶ年ハ松尾忠右衛門宗房ト名乗リ東華坊
支考ト號ノ碑ノ誌ス所ニ非ズ伊賀ニ生レテ伊賀ニ
死ノ墓ヲ何ヤラノ氏ト松尾ニ立ツト書ヲ見ル

[illegible]
傳云宗房文徳数[illegible]家譜を尚氏の善尼の[illegible]清盛の
臣下[illegible]彌平兵衛宗清者軍功世ふるゝ[illegible]所
武士[illegible]カ平家の繁榮も盛るを心[illegible]
[illegible]枕[illegible]一門もろ〳〵なほの清の[illegible]
枕[illegible]一時の[illegible]と[illegible]
[illegible]八方[illegible]孤敷せう宗清[illegible]平治の乱
頼朝の[illegible]と[illegible]
[illegible]宗清とまう[illegible]辞して[illegible]
[illegible]氏[illegible]恩を[illegible]
[illegible]義者の[illegible]

[illegible]
[illegible]戦死すゝ時宗清[illegible]
[illegible]紳[illegible]
宗房と宗[illegible]
[illegible]
人皆[illegible]名物[illegible]
杉庵[illegible]
[illegible]二男忠吉[illegible]
始て藤堂新七郎良精の[illegible]
[illegible]

[illegible]に別当深く信仰し良忠の撰禅[illegible]
香華水をとりて尽[illegible]つうる事すでて七日
以前忘何経忌と唱[illegible]地[illegible]
紀のくに高野山報恩院[illegible]
ますま松尾忠義[illegible]

父母乃もとより小忌[illegible]

傳云此句の意もむ[illegible]

天台山の西南[illegible]

源国清[illegible]門前の[illegible]

禅師みるふりして実[illegible]
もうう[illegible]
[illegible]入[illegible]

[illegible]
二童座[illegible]
一里[illegible]
其[illegible]

[illegible]
小も見[illegible]
言てうし[illegible]

の山に唐の天台山のうつしとて南山の寂寞小鳥の声閑にて

ほうらくと帰山をよぶ声はまことにおもふ

これのみふもひ入合せて侘まゝ若の浦こそ

引まふ和哥の浦なれ

それよりも名ふ浦うらもひろすふ万葉のうつくしきを始め無常のすまやうをもりて哀ふかきふのもふ風ぬまもなく一生の紀行なるやふ只夢幻泡影なるたとへ

宗房

住〳〵行ふうと五井茶のまの夢ひそうに道世のまことを夏〳〵ふそこそ

傳云宗房ハ晋の陶淵明う賢ぜしてふなり五斗米の俗ハ為ニ五斗米ノ迷ノ折ニ腰ヲ向ヘ郷里小児ニ号淵明う語けり

晋乃淵明はうらやむ

宗房

宝永よりとし春の毫

やそふまりて寛文六丙年春日うすき歟

まで秩て私有一主事あを思を
のまで秩付思の人を他
拾うそのなっを
つあまりまり
野をあうすて
沙小無門の関
統み跡跡跡を
東花坊の為
事子供
雑賀、金龍ト云
二十六の年
元甲年生
ニ不となる
呂をせ
遅退沢は
毒宗房ト小一の
ある者
且々ニ
高恙

宗房ト云ふ
二十六の年ニ
元甲年生ニ
ニ不となる
呂をせ
遅退沢は時
毒宗房ト小一の
ある者
且々ニ
高恙

右の[illegible]

雲と竜[illegible]

と書し[illegible]

[illegible]

[illegible]

遺像乃讃

宗房

世界梅ともやとらた時は
梅うて山ともや雲ゐより我

宗房

井川

宗房

拾穂軒と称す元来宗房の
古主蝉吟八季吟の門人なり
入門す此年山の号を得
杜国

宗房

[illegible]

宗房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山住の春浅き梅を折て尾花ち
きくる書あらるる小春も心のもとに小野とかやうち又
樹雪ふるも雪をみて又風情
うつろひ雨くも聞も感深くなん抑宮殿の
中こゑ高きを言と業にむれにこれをこひ
ものとのみ思ふ事のみ多くて雪曲をしるるの
ふり〳〵をれば実に九重幸の
形〳〵のかずのとゆくへ
かつぬ抱〳〵ふるてゐるの様

ふるてをや曲れるを来て月とともこりめて
うのうちとのとのひるのおく奥なくえんて神の
ふるとも時かりなれてこと
ふるなよりやうて心
腸ちぎりて花乃小賞
ものを比ちるる嘆きあるとて
今宵むつとおもふれとも共あつ和こうして
愛ひて雪成もれちる時の句

陽ちるを朝を朝ちるおひて
雪の意の春月ふんつんの時る

これもつまま…の…
書…
もとかも…
名所のみ…

比叡山

山吹や…

大日堂

鳥羽殿

…

遠墓野

風の…

浄瑠璃寺

…

嵐山

六月や…

野…宮

…

清滝川

…

…

なるべし　宗房

師走中の改元にて改まる年の
暮ぞ名残なりける　宗牧山紀二首

共に今年の冬かぎりかと
京にて不逢せんと契りしも
いとゞ中すゝまぬ春

心揺あとふるゝ雪の中　宗房

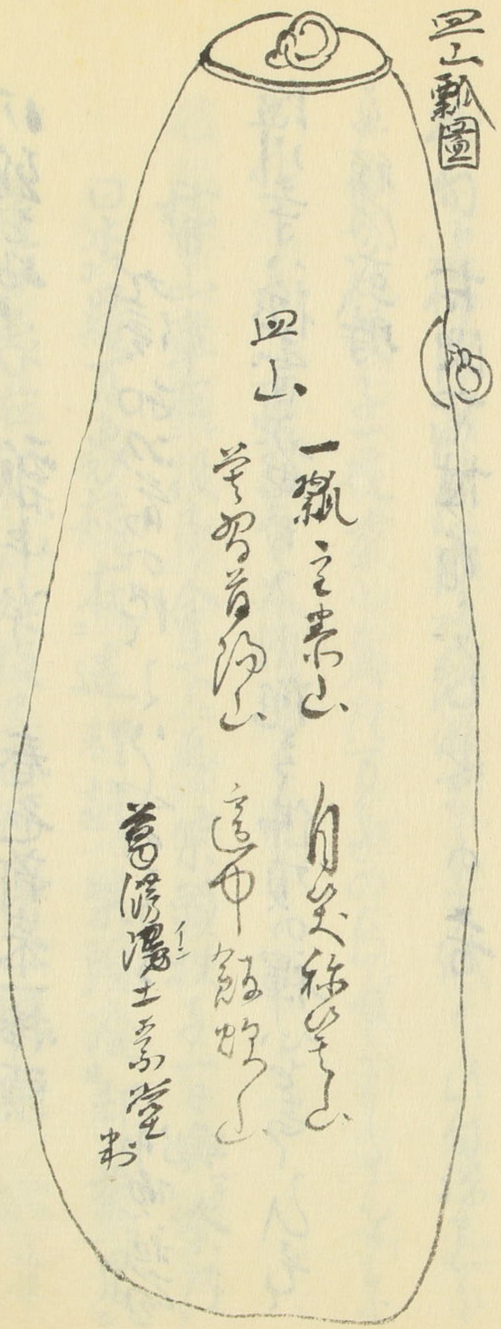
日本苑の外まで皆かくれ
なきまでもこゝ東路の海ふまれ
なんよもこひむつまじくこゝろ足を止め
年久保川水樋ふかせおさへんせ

雪ちるゝれば

通のゝ道の木橋こゝてゝ　宗房

他集小吟重ねてあくまでの
ものこゝろ一句の前句も同じなれ
ばこゝろ二変化にて句のこゝろ長句短句
頼申こゝ一句宛のものこゝ

地のこゝ海辺の気まであくまで玉磐も
弾心如落葉と詠て古歌体法師のこゝろ
も先かの字余こゝつゝあるこゝ
名もこゝまゝ別号こゝ風雅改メ桃妖の



四ツ口瓢圖

四ツ口　一瓢を半ばに折り
　　首の方を口とす　高一寸餘
　　葛湯土瓶等に
　　用ゆ

[illegible]
中て大悟のおゝ[illegible]
擯ゝ盤珪禪師[illegible]
佛頂和尚[illegible]
八頭を好む

九淀加茂の[illegible]

臨川寺へ[illegible]
[illegible]
或時

古池や蛙飛こむ水の音

[illegible]
臨川寺開基[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

梅香奥羽行脚の時山岸庄左衛門主人鹿嶋山禁混本寺へ至梅香佛頂八混本寺より[illegible]

[illegible]

月もやゝ梅をもる[illegible]　梅香

[illegible]て行おもふ[illegible]月哉　芭蕉

梅青八佛頂ヶ嗣法にて[illegible]眼をひらく風禪

法師とあふさけ句を云ふ[illegible]

傳云吉野の句ゝ山吹やの[illegible]芭蕉佛頂ヶ法

[illegible]のゝ芭蕉角ゝ同じ[illegible]とのゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

愚得坊禅門ヲ希ふ角ゝ風閑ヲ[illegible]

[illegible]ヶ芭蕉の風閑ヲ[illegible]古池ヶ集せよ[illegible]ハ

禅ふまゝ鎖居の時乃句ニ天下の俳ヲ[illegible]者ゝ

句ゝ[illegible]ヲ[illegible]ハ俳諧発句

消息義解ヲ[illegible]佐ヲ[illegible]師ヲ[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]の句ヲ[illegible]

佐ヲ[illegible]ハ[illegible]の句ヲ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三月廿五日 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

雲中庵夏之居士六祖禅師の画讃ニ

白の座つゐ[illegible]

許六と芭蕉のかとう[illegible]

こうくう見成かとよ[illegible]

師の世くなくなりて[illegible]

なしの一句そ[illegible]

さるのきあつせ[illegible]

こうそも又俳諧の道成[illegible]

大角なる老木[illegible]

ろる芭蕉流そ[illegible]

一

直指傳とうあらまほしう

傳云直指傳云許六選[illegible]

[illegible]席滅法正風卿の句を[illegible]

[illegible]浪の[illegible]

夫[illegible]や田の[illegible]

[illegible]月の[illegible]

[illegible]へ鍬口[illegible]

[illegible]千[illegible]

[illegible]経の[illegible]

[illegible]の[illegible]

二月五

許六

[illegible]

[illegible]

[illegible]

福書あやうくのせこぬすびの像

大井許六の画と姓の圖にて曰・
向陽三飛八萬史外よりも久しと称する庵妻迄有之

稲書くにけるものなり

とも付られいニ二を紀行

森許六古郷に帰れるを送る辞に曰 秋青

けり時栄明の辞を作りて面をおもてうら年貢物

云年の秋うの物ニ別をおしむ共に

深切にして ひとえ芭蕉庵

却て後日栄後ななり 風雅を忘す

年下洛をうながす行のみちや

風雅の為めにこの里風雅をこのみ

給ふ君すなわちこの君ありて二つの風俗

なするニなりまた風雅と云ハ

品二ふたつ用一なるまた風雅と云ハ

師とし風雅にをしへて師の画賛を画き

師の画賛精神徹よ入句を画を

なるまたうらうと称ハ風雅の実地

今風のをしえて用ふ所なし

新の画のをハのこと

あくなるもあり新

霊泉あらんと名つく（別墨にて老菴下云）

水帝城をめぐり神女そこに棲む　許士

芝と又五老井と四絶を脊に負ふ　楊樟豆に雲

花園四に八紫芝を出だす詩六首（文章にも詩六首の人）

器なり

とよんでよく雅致宗因武陵より檀林の額うつす

出家句あり檀林乃名ハ世に傳（つた）へし宗因俳諧乃濫觴

今彷彿れ耳に言語のおもかげをみて眼ふ姿はうかぶ

しきそうろうや或ハ葬踏彼（皮）もむりハ有ふ姓

千句十里或ハ花をめぐりて者（ものゝ）ありそうろう免（まぬ）れ

そうろう或ハ俳諧は宗因乃時よりの連哥にかわ

りそうろう附合を専て情をそこなふ句に誹言乃

論あり別に宗因流句も附句も階（しな）〳〵詞乃格なりにて

意に学ふ一つま道なふ格は檀林を例して

云て其たよりを法なりを以て貞門あり時ハ貞師

千句師乃ごとき乃門あり実おもよこしまの俳

諧そうろハ今様の人北堆口をおほて哥よみ学ん

人も一堅乃固意にて俳諧乃ハを主俳書るハあれど

俳諧乃心を得ふる師乃実に板書乃如く

我国ニ檀林ヲ営建シ
八虞慶ノ先ニ立テ
文風ハ和漢乃一新ヲナス
て世情ヲあつめ教ヲ
りて普遍相乃極ヲ
よりも法称上人乃
好いよりも古池乃蛙ヲ
正道ヲ見附ヨリ
そもそもつまや世ふる誹諧ハいさ
を元祖とよ

傳ニ東花坊曰俳諧乃傳ヲふい唐乃史記ヲ滑稽の
名ヲ以テ史記ノ評林ニ崔浩ヵ云滑ノ音骨ト誓ハ流酒ノ
器也轉注ノ吐ヲ酒終日不已ヲ言出口成章ヲ詞不窮渇キ
云ニ史記ノ索隠ニ姚察ト云滑稽猶俳諧ノ笑談訓諫
トハ家語ニ諫君ノ有五義一ニ諷諫二ニ譎諫三ニ降諫四ニ直
諫五ニ訕諫唯度生而行之吾ヲ従ニ訕諫ニ予解ニ云論語ノ
注ニ詩経ヲ評スルトテ凡諭ノ二字ヲモ用ユ訕諫ハ俳諧ノ別名ニテ
世情ヲ久和ト和ヘキナリ李由ヵ曰俳諧ニ九品有リ一ニ俳諧ニ誹
諧三ニ誹諫四ニ滑稽五ニ諧謔六ニ謎字七ニ空戯八ニ鄙談九ニ
狂言イツレモ口傳菅丞相ノ梅ノ神社考天神賛ニ

中奇幅而袖間掛ニ梅花一枝ヲ則指テ答佛鑑禪師明義杉法
然夢中ニ金色ノ僧アリ云我ハ大唐ノ善導和尚ナリ汝正路ノ化
導ヲ退轉スヘカラスト云ヘリ一對ハ夢中ニ漢土ノ法ヲ傳
ヘ玉ヒシ杭青翁ハ自己ニ開悟セシトナリ

杭青ハ檀林ヲ辛ク通リ廣ク學ヒテ後
延宝四年西厓水哲ヨリ伊賀ニ至リ事ヲ告ケ古郷
旧庭三徑就荒松菊猶存セルノミナラス
上野町ニ山田屋市兵衛俳名ヲ雪芝ト云者アリ杭青ヲ従ヘ
或時雪芝ノ宅ニ於テ話シ一ノ庭前ニ極メテ松ヲ具ヘ
形ニシテ秀モ蒼ク鬱ヲナリ杉ノ風韻頗ル

一文量の如くにて今時
一老松と洒せんてみる
一句の事にまかせていさ
云なんと言る声をはや
付りおくく　ゆく心外
一をき和泉和尚の同遠
原和月

一句一直　出合遠近　諸禮停止

右三ヶ條〻違背輩ニ
月日

菴主　風雅所　机青

不許葷酒入菴中

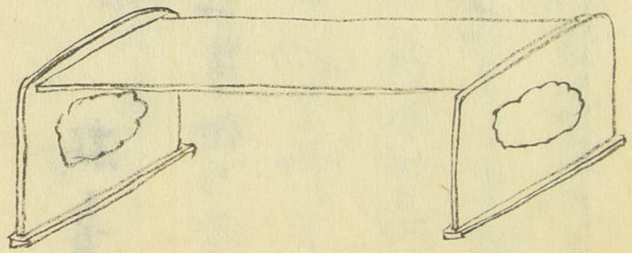
座右ノ銘

人の短なる事
己ゝ長なるとく事
もろいつは唇をし
ゝ其角ゝ誠ゝる附句ゝ
非をいさめ

机ノ銘　机青

間ゝる附ゝ髀をかきて嗒乎吹噓ゝ気を
葬ゝ附ゝ書ゝ紙とゝして聖意賢ゝの精神を探り

前略 小筆なりて義采乃ろすに入立なん凡そ
一物三用を考へくるすハす面二尺四方地乃
好乃卦を彫りて溜塗乾牡るの頃ゟ習ふ
片ゟあけて一用とせむやまた二用と
せむや



草菴に三大字乃額乞ふ其所京松陰寺通前町西
乃筆之

松青ハ秋ノ末古ゟ詠て更々

冬こもり志る人ハそ知 松青
延宝八年ゟて天和と改元有 南菴に天和乃
年夏去ら官ふたれ乃そなりに杉菓乃ゟし付
鎌倉乃ゟ生て来ん 初乃ハ 松青

或秋越人乃尊 深川乃秋
庵(松)ゟ春七ろ乃ゟに学そゝやか 越人
酒之ゟなくて七ろ乃月 松青

深川乃末文本松そゝわそゝ新ゟさして
川上とこの川乃ゟや月乃友 ヽ
光陰に馴ゟなく安秋松青初老乃七しゟ 柳青

白きのふの家に飽ざしの詩肴　天和三年の秋

老の名のかうがひもなき四十雀　桃青

明日乃我よ飽をおくらん二十九年乃非をそしるとなり

傳ニ云伯玉曰五十而知四十九年非ニ始覚之非ニ

すんいんりんぱ三十九年の非をさとん仏語の例ふ三

句のくるしからぬいふ語乃理屈をもてむそ松瓜

蘿月の所を作らく松尾向上乃附合とおぼつかなく

先に投子一椀乃茶乃美なるにつけ今や明日乃非

をおもひ仏語乃示すなる事なきにあらねしそも

松瓜が父母を慕ふ地の心ふかきや天和三癸亥

冬乃事なりしや、或時深川草菴乃雪をしのぎを深更乃

人乃あるきしてくをもまちこちい踏鼾ひくけはおるやと起ていて四方を見まわ

すに北ふていとくありしかしくおひさしくおとしく来るに松のすゑ

の火乃ことくなるものの松瓜がすさおおろしさいろんのさくすてにほのふかき話

ハかしまも思ひまろひ出る。菴の器財を皆門人乃もて行

まりくりさへ出るとて松瓜ふ乃ものなきて燈北市にも近きの

如大宅の妻女悟り辟喩品乃三界無安猶如宅無所住乃心なるべし

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

祖吟をうまく真享元年初冬の句之芝は長途の
雨にほたゝ泊〳〵の嵐に中〳〵そうそうの紀行
の前云に真享甲子秋八月江上の破屋をとおほと
いふも杜子の此ふり風の吹とはと門人
書林〳〵又句の上に荘周と置ハ荘哥に對したる
歟歟一説まゝたのやうにて木のもとにかくる所ハ古人行脚
まゝさゝめき休ふいこのやうにて川まいせをよはとあり
竹赤い世に空一荘哥の名人之中七文字赤い風と置ハ
古哥に
消ゆくひぬ人の秋の夕
方をかし〳〵しの葉の声

いさゝ川柿本屋庵赤い路花萬葉に此しての或ハ歌人
あるとも西行の諫稱むさうの人にして木ぶかもちかる
如しと云風雅の自号ホもまく馨さる句之れます
檀木堂を移し風の匂ひ語る野水かさに有ます
笠の山茶花と云招相對の句なすゝてすゝみの日撰集
の好年の上冬の日の名ハ萬分の四ホの眺望に
霜月や鳥の名よりく並居うと西行の句作ホ
冬の朝日のあまねなすゝきと梨と柿の画中の俳と名付と
すゝきれなるに冬の日ホ
星崎と云ホ月十

里遠乃つきなく見やらるゝ海　芭蕉

摂田宮（伊勢の時の役

磨ませし鏡もくもれ雪乃なれ　仝

志摩にて

寒き朝見なく特しいそこ海　仝

同夏宮四十年毎に式年遷宮

年々や伊勢に至り庵を結ぶ共を

云伝へそを養とや

いつの花頃乃ことにやいつの

秋よりかゝるを云伝へそを事をは

一里いみ外花ちり子孫かや　仝

京都東園尚乃祐受なし給ふ時

上東門院より桜分植庭に移し栽給ひて與福寺乃別当

に命し給ふ則命を應を無るに依て等をいふ也桜

我寺乃霊木之何そ他よ栽さんやと諍論そしき後后の

叡慮なる志深きを感し給ひ花

染門と感し給ひ旦後世に至る迄に二川の事

なんて我桜と稱へし

名一ふしと仕賀國守野の庄を附せられ年毎の花の時

墻を回してけるなきやうにむそふ外て吉野村谷花

墻の度と號しける事には桜雨ふ移栽らきしと

有に芭蕉乃句者

新大佛寺旧跡 阿波庄

ふた夕陽なごりは石の下 芭蕉

伊賀まで所〻俤語るべし——庵左ごと記す

無名庵　凡行庵　東蘆庵　西蘆庵

当二蘆庵の号ハ橘鏡の別墅と支子孫に傳フ

蓑虫庵　翁東武素堂が許く消息よ云趣ん

蓑虫乃考分開ふ事よ草の戸 芭蕉

此句の通輪に蓑虫の説を作りて伊賀ゟ送る真説ニ曰

蓑虫説　素堂

みの虫〳〵。夢のおのれなきをあハれ姫ちゝ〳〵となく

き孝にもるなるものか。いつに傳へて鬼の子なるべん。ほ女うまれさうなるやすき。鬼をも。聲史を父として舜あり。汝むしの舜なるべし。

みの虫〳〵。夢のおのれなきをあハれ姫ちゝ〳〵となく

杉虫を夢の美ふうあるか。公竜の中に花野をなき。葉ゟハ絲を吐り。ひるしじて賤乃ゟに死す。

見渡虫〳〵。甘施ゟ〳〵都ゟ名あれぬ。胡蝶ハ花ふいそうしく。蛸を蜜をなむゟうして往まおくやうなり。誰ゟ為に羊をあまくゐるぬ。

みの虫〳〵。ひぐちのおゟ慢ふ。別ゟに一滴ゟ泪ハ

貝をうかべ。一葉を
浮蛇のいまだ
泊うすこしをあまよ

蓑虫

漁父の一条をくたるに同し。漁父
なをとき。風俗ふる人の
をよる。大公望文王
をはまきうる。いまの
見てるくあり。
ふる事ども
蓑虫

柳ふつきそ
よ
棲ふすうて。

定家の四分起し。妹
感をまむ。風の後を
そいる。や。

又以男文字述古風

蓑虫ニ

落入懐中

似寄居狀

従容侵雨

天許作隠

此説も蓑虫庵小池ゟ

一絲欲絶

白露耳ニ

無蜘蛛工

孰然乗風

我憐称翁

脱蓑衣去テ

寸心共空シ

青苔粧躯

家童禁箒

誰識其終リヲ

乞食庵ゟ再興ス

乞食庵ゟ再興庵ト号ス由前文有之乞食庵

共之伊賀の土庵より（幻住）芭蕉の二庵をそこ〳〵蕪の七庵
ト云翁滅後抔動もすれば月雪に俤の庵や十徳
いふ句も安庵をさすなど〳〵
伊賀に翌年来さくにして大和路をわけ聊し草枕

奈良にて
東京七重七堂伽藍八重桜　芭蕉
初瀬山
春の夜の人声堂ノ隅　全

葛城山 昔の者眠ス
うつれるや神代の山ばくら　全
乳門の滝 仙室の滝に同瓶とて埋む者
乳門の花や上戸の立ちふさん　全

日本
細谷にて
酒のさに濁さんの花の色　全
西河の滝 すき川上ニ大滝とふ
ほろ〳〵と山吹ちるか滝の音　全

すき社山より吉野の奥へ入る
花にうそ〳〵初秋の風を聞　全
西行庵 日本とくらの滝
ここに庵せんとくらの滝
すき社或坂ふやとりて
枯芝や薄雪まだらに春の色　全
又奈良ふるとりて
菜の香や古き都の仏達　全
元禄元年
ぜひなの古主婢子乃嫡子探丸子と申ス芭

蕉の像をきざみ杖竹などの旧亭ふたゝび跡なつかしき
又探丸子別荘と花の像・ありて和れ旨の跡もとゞめつゝみて

さゞ波のうら花のみだれけるかな　芭蕉

春の日をうつして良枝の赤みたる
初雪踏あけて軸とす　探丸子

檀来堂花の句集を編て深川の
菴へ持参――為に序文をもとめければ
と有るうへ一日ゆるりと逗留せよ花の蔓をつゝ向ふ

二日ゐもありけり

粉多云杖の句をおくる　延則　曠野集先ご負ありり野水ノ句ヨリ

さ迄に芭蕉庵の俤日ごとに盛ンにして遠方そさる
あらんそのも菊ももれ折ふしも庵もれ折ふしも橋有舟有林
有時有

もの音鐘の上野より淡雪ふ　芭蕉

と眼前の奇景も杖ふるまゝ例の旅癖なれ深二年三月廿七日の程庵を出る
一年越んとおもへ共元禄二年三月廿七日の程庵を出る
門人曽良を伴ひ曽良ハ河合惣五郎ト云リこゝに松尾芭蕉の羈旅をさ
奥の細道と紀行す当ル晩着髪ヲ剃五ヨリ改京橋ト云
天地ハ萬物逆旅より光陰ハ百代ノ過客より下云文になぞらへ

月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也
る杉風の一冊に四半の小本なり紀行名に集細道とハ集地
名に萩桔て奥の細道と改む。先ず書き初め
細やかに道すがらの事なども記しまろ人(本マヽ)の別も更
矣立の姿こそ野中の一里に泪をそゝぎ
行く春を近江の人々と共に見おくらんと
と志し春山のおもかげ霞つゝきあはうすく
浪の音松島の月まさやかに寂しさ
猶悲しみふかき別れの泪をおさへて
行道なを進むに

草加

千じゆと云ふ処に
痩骨の肩にかゝれる
ものは
おもき
荷物
也

早稲田

此あたりに
芭蕉の
旧跡
あり
と人に
教へ
ければ
たづね
侍れど
それと
しるべき
人も
なし

廿七日
室の八島
同行二人

糸遊に
結つきたる
煙哉

廿八日
日光山
仏五左衛門
と云
もの
の
許に
一宿
す

あるじの
云ける
やう
我
等
が
先祖
は
平氏
の
一門
にて
かの
九郎
判官
義経
の
ために
滅ぼ
され
し
平家
の
公達
に
して
今
この
山
の
奥
に
かくれ
住
ぬ
と
聞
伝
へ
侍
る
も
の
を
今
は
昔
の
語
り
草
と
なん
ほと
ゝぎす
平家
ほろぶ
べき
国
ぞ
鳴く

黒髪山

剃捨て
黒髪山に
衣更

曽良

かさねとは
八重撫子の
名なれや

曽良

木の
下闇
茂れば
茂る
ほど
よし

曽良

あらたふと
青葉若葉の
日の光

曽良

湯殿山
銭ふむ
事
を
禁ず

湯殿山
銭ふむ
道の
涙哉

曽良

語られ
ぬ湯殿に
ぬらす
袂かな

曽良

湯殿山
にて
行者
に
あふ
事
を
得
ず

湯殿山
あびる
ほどの
濡
手
哉

曽良

羽黒山
にて
南谷
に
泊る

有難や
雪を
かをらす
南谷

曽良

羽黒山
にて
俳諧
興行

涼しさを
我宿に
して
寝る
ほどは

曽良

三日
月の
句
は
何
処
ぞ
や。
先
づ
人
々
に
発
句
を
と
望
ま
れ
し
ま
ゝ
に
取
あ
へ
ず
筆
を
と
ゞ
め
侍
り
ぬ

涼しさや
ほの
三日月の
羽黒山

三日月の
句
の
上
の
一
句
に
て
尊
き
こ
と
限
り
な
し

雲の
峰
幾
つ
崩
て
月
の
山

雲の
峰
幾
つ
崩
て
月
の
山

曽良

語
り
伝
へ
て
奥
の
細
道
に
行
脚
の
事
を
思
ひ
立
つ
事
三
年
と
云
ふ
。
又
紀
行
に
書
き
残
せ
し
事
共
を
集
め
て
一
部
と
な
せ
り
。
今
度
の
旅
行
に
も
多
く
の
人
々
の
餞
別
を
請
け
た
れ
ど
も
皆
紙
子
一
衣
に
留
め
て
後
の
志
しを
せ
ず
。
路
用
の
金
銀
を
ふ
ところ
に
し
て
三
里
に
灸
す
る
者
は
一
夜
の
宿
を
か
す
べ
し
と
い
へ
る
ふ
る
事
を
思
ひ
浮
べ
、
痩
骨
の
筋
張
り
た
る
肩
に
か
ゝ
れ
る
も
の
は
、
おもき
荷
物
也
。
と
自
ら
笑
ひ
て
行
く
。
途
中
の
苦
労
は
さ
ら
に
い
は
ず
。

千じゆ

痩骨の
肩に
かゝれる
ものは
おもき
荷物
也

早稲田

此あたりに
芭蕉の
旧跡
あり
と人に
教へ
ければ
たづね
侍れど
それと
しるべき
人も
なし

廿七日
室の八島
同行二人

糸遊に
結つきたる
煙哉

廿八日
日光山
仏五左衛門
と云
もの
の
許に
一宿
す

あるじの
云ける
やう
我
等
が
先祖
は
平氏
の
一門
にて
かの
九郎
判官
義経
の
ために
滅ぼ
され
し
平家
の
公達
に
して
今
この
山
の
奥
に
かくれ
住
ぬ
と
聞
伝
へ
侍
る
も
の
を
今
は
昔
の
語
り
草
と
なん
ほと
ゝぎす
平家
ほろぶ
べき
国
ぞ
鳴く

黒髪山

剃捨て
黒髪山に
衣更

曽良

かさねとは
八重撫子の
名なれや

曽良

木の
下闇
茂れば
茂る
ほど
よし

曽良

あらたふと
青葉若葉の
日の光

曽良

湯殿山
銭ふむ
事
を
禁ず

湯殿山
銭ふむ
道の
涙哉

曽良

語られ
ぬ湯殿に
ぬらす
袂かな

曽良

湯殿山
にて
行者
に
あふ
事
を
得
ず

湯殿山
あびる
ほどの
濡
手
哉

曽良

羽黒山
にて
南谷
に
泊る

有難や
雪を
かをらす
南谷

曽良

羽黒山
にて
俳諧
興行

涼しさを
我宿に
して
寝る
ほどは

曽良

三日
月の
句
は
何
処
ぞ
や。
先
づ
人
々
に
発
句
を
と
望
ま
れ
し
ま
ゝ
に
取
あ
へ
ず
筆
を
と
ゞ
め
侍
り
ぬ

涼しさや
ほの
三日月の
羽黒山

三日月の
句
の
上
の
一
句
に
て
尊
き
こ
と
限
り
な
し

雲の
峰
幾
つ
崩
て
月
の
山

雲の
峰
幾
つ
崩
て
月
の
山

曽良

語
り
伝
へ
て
奥
の
細
道
に
行
脚
の
事
を
思
ひ
立
つ
事
三
年
と
云
ふ
。
又
紀
行
に
書
き
残
せ
し
事
共
を
集
め
て
一
部
と
な
せ
り
。
今
度
の
旅
行
に
も
多
く
の
人
々
の
餞
別
を
請
け
た
れ
ど
も
皆
紙
子
一
衣
に
留
め
て
後
の
志
しを
せ
ず
。
路
用
の
金
銀
を
ふ
ところ
に
し
て
三
里
に
灸
す
る
者
は
一
夜
の
宿
を
か
す
べ
し
と
い
へ
る
ふ
る
事
を
思
ひ
浮
べ
、
痩
骨
の
筋
張
り
た
る
肩
に
か
ゝ
れ
る
も
の
は
、
おもき
荷
物
也
。
と
自
ら
笑
ひ
て
行
く
。
途
中
の
苦
労
は
さ
ら
に
い
は
ず
。

千じゆ

痩骨の
肩に
かゝれる
ものは
おもき
荷物
也

早稲田

此あたりに
芭蕉の
旧跡
あり
と人に
教へ
ければ
たづね
侍れど
それと
しるべき
人も
なし

廿七日
室の八島
同行二人

糸遊に
結つきたる
煙哉

廿八日
日光山
仏五左衛門
と云
もの
の
許に
一宿
す

あるじの
云ける
やう
我
等
が
先祖
は
平氏
の
一門
にて
かの
九郎
判官
義経
の
ために
滅ぼ
され
し
平家
の
公達
に
して
今
この
山
の
奥
に
かくれ
住
ぬ
と
聞
伝
へ
侍
る
も
の
を
今
は
昔
の
語
り
草
と
なん
ほと
ゝぎす
平家
ほろぶ
べき
国
ぞ
鳴く

黒髪山

剃捨て
黒髪山に
衣更

曽良

かさねとは
八重撫子の
名なれや

曽良

木の
下闇
茂れば
茂る
ほど
よし

曽良

あらたふと
青葉若葉の
日の光

曽良

湯殿山
銭ふむ
事
を
禁ず

湯殿山
銭ふむ
道の
涙哉

曽良

語られ
ぬ湯殿に
ぬらす
袂かな

曽良

湯殿山
にて
行者
に
あふ
事
を
得
ず

湯殿山
あびる
ほどの
濡
手
哉

曽良

羽黒山
にて
南谷
に
泊る

有難や
雪を
かをらす
南谷

曽良

羽黒山
にて
俳諧
興行

涼しさを
我宿に
して
寝る
ほどは

曽良

三日
月の
句
は
何
処
ぞ
や。
先
づ
人
々
に
発
句
を
と
望
ま
れ
し
ま
ゝ
に
取
あ
へ
ず
筆
を
と
ゞ
め
侍
り
ぬ

涼しさや
ほの
三日月の
羽黒山

三日月の
句
の
上
の
一
句
に
て
尊
き
こ
と
限
り
な
し

雲の
峰
幾
つ
崩
て
月
の
山

雲の
峰
幾
つ
崩
て
月
の
山

曽良

語
り
伝
へ
て
奥
の
細
道
に
行
脚
の
事
を
思
ひ
立
つ
事
三
年
と
云
ふ
。
又
紀
行
に
書
き
残
せ
し
事
共
を
集
め
て
一
部
と
な
せ
り
。
今
度
の
旅
行
に
も
多
く
の
人
々
の
餞
別
を
請
け
た
れ
ど
も
皆
紙
子
一
衣
に
留
め
て
後
の
志
しを
せ
ず
。
路
用
の
金
銀
を
ふ
ところ
に
し
て
三
里
に
灸
す
る
者
は
一
夜
の
宿
を
か
す
べ
し
と
い
へ
る
ふ
る
事
を
思
ひ
浮
べ
、
痩
骨
の
筋
張
り
た
る
肩
に
か
ゝ
れ
る
も
の
は
、
おもき
荷
物
也
。
と
自
ら
笑
ひ
て
行
く
。
途
中
の
苦
労
は
さ
ら
に
い
は
ず
。

あるじを去る詩句云傳う後人二千及

武陵乃まりし

古哥ふ　いくとせ岡

谷西川分神一あやめぬ日や仙墓ハ宮城野いもとあの

萩小松と共ニ玉田よこ神

松恨の野田乃玉川仲の石未乃杉山ニ来乃感ス具ニ語ラ

田神ニ誇ムて一夜ゐなうかめて杉崎に宿る松嶋賦ヲ

ホて八句ナ一露に即ヲ名ル郭公ハ曽良ニ告ゲ千鳥ヲ

る哥乃ヲ衣河ニ入ル

武人曰箱乃一鎗ヲ

さしハ蒼朮ヲ乃ヲ

平家物ヲ乃松ヲさへ

ニ乃館乃夏草に芸ヲ乃ヲ

ホ乃ヲ先ヲ乃ヲ

ヲ乃ヲ

尾花澤ニ乃ヲ

涼しさを我宿ニして

這ハせよ

解ス後人一句やうやう

百ホト

あさうすくひやうたんになくらるゝ

声ヲ乃きゝは

さゝ小鳴き。かひ名さ西ゝ論ス

ゐ乃ヲ

ゐ乃ヲ

ゐ乃ヲ

蚊火屋飼屋農大屋。俊成卿の御説曰田なる人山田の
家に別居して居たりをくやしくて鹿をさくも
畑かすみ又下に鳴うつの蚊をそくとなくと云ふ所以説
小飼屋と田舎そだちの飼ふひこをそくと
と当所の多く集る蚊をくやしくて畑をさくしむと
云説なり古歌六首義合難陳乃詞ふくて——

整飼する人もすくなき付乃すくなき称　等良
山形乃立石崇あふぎ佳景寂寞小山石ふみ入蛭
乃声を聞前の緑風に吹通て雪ふかき富士川ふ
雨晴のけしきも打そひて早き雨小樟さしかくして

異まりなく高き山最上川　まさ
羽黒山と至て高谷乃別院舎り重なりて仙跡無双者
添しもやあの三ヶ月の羽黒山　まさ
月山にて
雲乃峯幾つ崩て月乃山　全
湯殿山そ
語れ雨降ぬ祓そのれ　全

仝

仙人山銭葵の間の雨　等良

雪乃暑酒田湊に掛り有川乃夕涼と触国南手
船をもまち上て一棟の老木西行の記念と

象潟や雨に西施が合歓の花　曾良

松嶋は笑ふがごとく象潟はうらむが如しとやせまし

酒田にて

汐越や鶴脛ぬれて海涼し　翁

蜑の家を過ぐる頃より雨降り出でければ

雨雲に吹き込めて夕涼み　曾良

岩上に雨を凌ぐ

波の間や小貝にまじる萩の塵

あつみ山や吹浦かけて夕涼み

汐風や真砂を飛ばす南谷

暑き日を海に入れたり最上川

最上川は大石田の上流より数日の間舟に乗る

白糸の滝

青葉より青葉に通ふ清水かな

温海山

あつみ山や吹浦かけて夕涼み

汐風や真砂を飛ばす南谷

暑き日を海に入れたり最上川

最上川は大石田の上流より数日の間舟に乗る

白糸の滝

青葉より青葉に通ふ清水かな

温海山

岩上に雨を凌ぐ

波の間や小貝にまじる萩の塵

酒田にて

汐越や鶴脛ぬれて海涼し　翁

蜑の家を過ぐる頃より雨降り出でければ

雨雲に吹き込めて夕涼み　曾良

象潟や雨に西施が合歓の花　曾良

松嶋は笑ふがごとく象潟はうらむが如しとやせまし

酒田にて

汐越や鶴脛ぬれて海涼し　翁

蜑の家を過ぐる頃より雨降り出でければ

雨雲に吹き込めて夕涼み　曾良

岩上に雨を凌ぐ

波の間や小貝にまじる萩の塵

あつみ山や吹浦かけて夕涼み

汐風や真砂を飛ばす南谷

暑き日を海に入れたり最上川

最上川は大石田の上流より数日の間舟に乗る

白糸の滝

青葉より青葉に通ふ清水かな

温海山

永長大に怒りて悍吏の云事ゝ如くに
無實を以て罪になし終に去て西行法師
見て大きにいきまき紀氏を制
して曰余都を去るに
何そ言をうれんやまた箇の
そ西行を吉卿く追ひかへす
いしたてゝ恨いふつゝかな
ゆりしいとしやんのうち
和親をすゝ子知ゝしお
新帝を武衛のもの新院のうの如く指揮を同ふして

越女を寵す萩と月と戯れ
早苗の雪ぎをきて
帝國ふ能ゝと云ふ者本ゝ法
物ゝ人員帝右て連
ありふ許視を賜ふ
事ゝしる筆の
其怪加賀大ゝに招きゝ画
翁これ
秋の
秋風

吏登曰はい能須翁と云人の句に此一字の多少なる
ものは如何にやと連衆かねがねて或いは人天の師表なんどと
愚得坊評曰二大老の吟話を聞して新を喜ばす連衆乃
たゞ此心にありや或日子誠よいつきん日翁い
蓼州ふむ之能い瀟湘ふむ之思い陳君我い許州と云
紫雲湯山中 芳之 なる句白雪湯とも云ふ
山中や菊はたをらぬ湯の匂し 芭蕉
那谷観音堂 幸右さまく
石山のうへより有明の月 全
其下降当良い松を廻て
如此の句良い松を廻て翁先ず川柳
如此の句良い松を廻て翁先ず川柳
如此の句良い松を廻て翁先ず川柳

月見ても玉江の芦を刈る蘆

夢ともきこえてつるの
須磨より猶あはれなる夜の
浪ますます深の松風

秋風や蕎麦も白き畠も
旅の空

夢良も伴蕉よりまさる合歓
昌房ハよろこびの涙ハらはらとこぼるるまゝに

七月廿日の夜天照ス神を祀りまんと角文字のソセ
ゝ向ふ舟二見を別まハりて
ハ遥ニ村里の高ふ家ゝ田畑を探り日数ゆくます

名所尽
名甲板
柯の木の花そまの
名ハ西行法師のかせる
かさゝぎの渡せる橋に霜ハ置ねどしるき夜半かな

子良館
名甲板
ほと〻ぎす一声の
菩提山 神照寺
名甲板
山ハかすみ
二見浦
名甲板
うら〻かや

太神宮ゝ
伊勢の
名甲板
ハ
芭蕉

名甲板
ほと〻ぎす
名甲板
山ハかすみ
名甲板
うら〻かや

全

全

全

句ありて二見浦文臺ともに作ありなり
冬ながらも二見の浦をはるかに詠めおろし
北かぜや磨ぬる鏡ぬく
（芭蕉翁）
四方より花吹入をて焼る海　芭蕉
唐崎の松も花より朧にて　翁
雪句伏見の作ありそれも当の雑吟也角田曰其角の雑吟也
はれ曇ともいはぬ春の空　翁
此ハ雪ともいはぬ春の空ともいふ也角曰此ハ解あり又其ハ其ニの
句ともいふ発句ともいはず　翁
発句なるも知ず　翁
ら此ハ二等にくらふ翁曰其ニの雑吟ハ理ありて此ハ其角の解あり又其ニの
花すゝき打乱れ穂の長き哉　翁
おく山同様ニ山名ヲタヅヌ
おく山や同様ニ菅沼曲水ら亭にて興ス　山下ノ方石山ノ
菴ト云ハ七十四番ノ新曲水ノ俤父俤ヲ移リテこゝに住ス
翠ふりつむ幻住老人のなりをおもひやるべき俤をす。
幻住菴の記ノ文
処て実に住ニも叶ハ幻住菴の記ノ文　此ニ記トハモノニ通リ
記ト賦トノ差別ナリ

先たのむ椎の木もあり夏木立　芭蕉

源氏ハ九帖の事に立ちらんなと教ニ椎うゑ
幻住菴の額　義仲寺ニあるハ良山ノ僧正の筆ナリ　南園吟行

多田新山　　犬上止住　　多田神社

冨新小屋更せしもの奈良山　　そ千代

関田　長橋　鹿橋　そぞろの橋

望田浦

須磨て月をし（今）　伊吹山　　多田神社

真佐木月も新まし（今）

三井寺の門なくもがな　　今

此ひさ古集ふる共いと汗ばめて

事を趣人すくふ月庵して集の名ぶ膳所る猿蓑撰

る門人宗而そ去撰集ぶ新て秋句ぶし事也

ち一夕箱ざ所ろ名ぶ

蓑くに原れい原しく作る

入集せよと宣ひき俳諧乗ざ俳諧とそ知るべき

寺ふくふ森れい原しきや庵代　　宗而

同様蓑選の附文箱句に

山木戸や稜のさゝめて冬の月　　具角

共なき年逸ぬ年なきの月。と宣ひ句

知るに神ハ山木戸無（文）字佐ぬて集の戸と漆ち箱日

角々冬ふ亜ぶ上ぐき句ぬもの

せりて後大津ち箱の文ぶ山木戸ハ

秀逸ハ一句も大切なれい相言也校ぬ乃上ぞもいそき改へしと

孔北日集の戸山木戸させる猿方なし去年日山月を集の

戸小春てふれい等庵の気
侍るはそれ情あれよ和漢くいふくなし其角ら冬
雪の冠ふ亜ばしくるもまたそりしとゆき松翁いさうく
つきありくる時

病屋も秋寂(望回ト七)

蝶の家ハ小鰯よ

ト二句入集せしそれ兆日病屋をさる事なれと小鰯老
父ありて旅舟ハ事なくさ扨ふ秀逸しト
云去年日小鰯の句ハ眸をいつまでそのなく得る時
事の時よも生人病屋ハ拾ふく越新かしてう変化集

ほうんやう海一郎ふ扨ふ句大こそ入集スこそ後翁曰庵人を
小鰯ふ同しめく海こ今ふと変化ト云
松翁ふ逢ふりて語の当ふ来う許ふ至る法ふ語の時俄
去来姓ハ向井氏玄関老人の末乃ふ生れふ其父の筑紫
乃方に生ふも俗ハ重次郎ト云文武第伯ふして若年ふ
渋陽ふ住居ス予交ハ拾て十五年ふ成しそふ多年の
大陽生ふ浴ハ事ふ成て通ふ柿の実四十ハ首蔕柿
舎ふ額ハいふる落柿舎の記ニ曰

去来

嵯峨ふきりの始ふる家侍るそのふ通ふ小柿の実四ハ有
也ふ日六ふ芥子ふ始ふる家ふ侍ふ事ふ秋ふりふるこ

きく哉わかの一雨風あらは王祥が志ありよ

笑ふ者爲ともされかの天の帝乃恵もあれかしと願ふ

人毎なをいそのそ子ふ八月乃赤やこふつりぬ

新米一ふくろ高人乃まかひ求めむと一巻文

さへ咲ひ給ひぬ乎八猶新米にそまりくるにころく

と風孔をしあ高ふ庵よつゝみ多新穀乃

甲まん明年八高人見奉米(猶)つくりとお酒の和向

盤乃ひゝり白髪生るともよゝが業をし伝ん乃かく計

多乃ゝ柿を見ん乃の價乃てもやと俗ブ

と便をれ八甲ゝ哉ぬ八老乃つゝなをの許く消

是ハ去年乃柿舎乃去年と書をゝめり

柿ぬ(の)ゝ村ゝ

ゝ乃ゝ哉ゝ

風雅ふ爲るく扶門人乃新米を称

ゝ乃ゝ哉ゝ集撰集乃有ゝ

湖乃水ゝ

巷なるゝ乃ゝ俗搆乃新風ニ乃称ゝ

ゝ乃ゝ

本ゝ乃地ゝ

同門乃ゝ旬に八風ふ二日乃月乃欲ちる哉。と云句を添る

吉事云ニ日の月といふ吟もち
とおぼしき句ありこれ二日の月とよめる古作なるべし其名目
除をさせるなり此句何を指て作しやも見えず全
所の吟句も唯地名と聞てよめるよし字の中にて無
和名抄をあさぬこといつれの年歟

却る今日のお（ママ）事師走のはじめ
武夫菊の許に消息送る文
　　認め終て我を俤と
　　いふ句共問るまゝ
　　あさうわか草ちまき
芳柿舎に夢千事を語て曰
曰発句といふもの
沙をあゆま秀枕ひるや雲来曰菊の句は其角の夢うつ
菊の句を和すとつゞけて俤
事なし芳る赤ふ越方風も
庵さまの年一つ昨句は口を（ママ）事師
見えん発を出すまゝ夢千則
木陰う散い菊よきく学
発をとく十句せんと所作
至の眠をさまし福の
蒼門生此年一乃ふ句
生い春別の木なくと
庵か蒐多く住く
衣れ墨所を却
賦を作る

寒く更行て来るにや賤が暗の窓
舎ふ蚊々の羽鉢和ぬもうるさく
音小風をきゝくるめ扨月さへ
ひかんとうつりそひて

帯こゝもと伽そも見せも添ふさき　去来

かく哀れふ晩比例のかりもうるさし
火宅を出るはつめりあり抜るぬし
ぎに先国を思ふ死をのがれ
云をうつゝやなうつゝと

長嘯乃養も免くる品ありさき　其角

右ノ傳云ホト長嘯子ハ木下肥後守家定
公将美枝ち御後一旦本国を領
城ありしをゝふ休ありて京ゆり
ありて西領する許ありて西領する許
長嘯又天秋菊ト云其ホノ
ほゝ等の記乃松の記ホ、記されゝ共ゝ集中ニ編
華ホ雪をホ原のごとし

又待宵橋ホ月を待ホ洞を
雪をまつりて六ゝ歌仙乃図像をかゝせつゝねをゝ
ろかり祝百尺余りとホ記ひろく山谷林園をもあんなるゝ長嘯橋を
等そ九條相國道房公をもし

金声玉振を求て天下の人々笑ふ事
変化をなす事二作をかさねい事を重ねい
俳諧に活きて実情に向色をあらはす事一
近江曲翠士遠くより
と近江路にもり程なくをかさ秋の昏。
木曽路かけ

送る神川果ホ雪の秋　　支考

拝上杖をつかに
ほうてうにも

如雪　　全

活切神社

ゆきもつや稲の刈株一　　全

更科

いさよひもする更科の郭公　　全

俤や姨ひとり泣く月の友　　全

陽炎

姥ひとり有明殘す月見哉　　全

東武ヨリ帰庵ニ着申ス十三夜記

芭蕉菴十三夜記

そ秋の雨に月をもてあそぶ（本ノマヽ）

越の人々つくしの記をひらきてい

ひ侍りていまさいくそ

日あしきくに月をまて此ふみのそ

このな秉空こよひを堂する津ホ三井寺にて

くたびれもせずおわの日のよもすがら風月とめ
あかす亭——

庵主に不二ひとつの月を見よ　素堂

新酒に焼餅月見せん　杉風

後の月いつはの雲もなかりやと　翁

あつまの空も名のみ也けり　友五

秋ふかき木曽の仮寝の月見哉　嵐雪

後の月名物さらす芋の露　嵐蘭

木曽の痩もまだ直らぬ後の月　庵主　芭蕉

十三夜

中秋の月を文料焼捨ようかれおりきて猶その名
さすめかしき三形をうつす又十三夜ふたなりぬおしい
若公のむかしをも云あるは庭訓帝の神て詠
させ給ふなるも侍らん等のうた他の書にま
さりてふる風流ありてなきさまにおひのたゝ
もとゞまれるかしてなむ見る人称をなんくるなり
有て一抱箱の古硯をもて隆筆するのその以圓受まて、
大山顔和尚そて大徳の場にくるしくおりしるが成附箱の

お卦のうまうまうかひ作るに年月時日なき古暦とあるも
実遠き並考せられるに華そめ封ぜられ
きることおそろしい一句の意の秋風の吹裏を雨にきゝれ
うきものの枕こそくさ蔵てふ意ならめ辛労
浮世ふるめかふるさゝふのうされいあるまゝみて
その外い潜てふ人とハすれ走ちこちよ事ハとい
心知雨の見えなるとも老の涙のうせはかつぐる
しらぬいこゝろの雪をとりさゝき集いかゝの木をふて等う
老の身くれおまゝにに旬あにかゝれ自れに山家集の晋
難をはゝ毛皆人共のの杜る美なんれとてそもゝ

門をふ世ふ三千人と学つゝ支角岩をしして十
大才をなかてるも抽斎の通前のうちなる奥ねり師かゝし立
叶雪のうちにて通隣の門人と称ふ地をの一巻
陶庵の後再び芭蕉庵にこりん

芭蕉なるり川雪辞　そもゝ

菜を東離りをかゝ竹を北窓の君と成る牡丹を愛
乃ち洲すありて世芭蕉をけざる荷をふらる事ぬかなれ
水ほるかれハはお咲すいつれの年ゝや栖をは境にこり
すゝき芭蕉一本なる心ゝのみひるん
新撰堂を倫一支角岩をして庭をせゝる茅ゝ

たくて丈性そう一倦情柔かいなどを事なしとしあ
張横渠が新学をうて倦学されかそ〳〵と其二なそん
広舎陰ふ桜ひて風雨もやみれ安きを先すおのと 箱の主張今になす
を神そ翁を孫のまを仰を好んで卑き淫亜を流水り書くて
貴い孫晨の蒙席ずうちん許由の徒歌かりまや
広をうかさき一至一叔を李川さ〳〵拇下石上枕南そ〳〵裳
庵たる室卑ふ西(クル)てい朴牀を席を同み杉根を花〳〵深山
よ森完ふ〳〵ずこよふ心ありくをむとさるれとて十仞手う
おそ叔その主そ氏をあされず白とも歩る到あてい又こを我
胸中を道祖神ちさいかりへ本なりと語ふ親〳〵とや

住ぢりぬ旅の日や立尖燈。芝い英語和名
の旅の世にすま旅葬しそ草枕やをの中ま養を
見るふ。とよませのふに名合せ〳〵句と和 庄子一生
旅ふくらし冬ゐと竹と竿つ〳〵生涯をかろん 筆をしむまたび
ける深川の蓑な又立ふ須磨ふなふありむくそて

菅甲筆幼翁に老が帰 そもの

傳云武州箱門人か発句語りを云ほと白氏文集を
見て老学を云病褥をつくる日句ありろれい日句と又
けうとなふ小田褥ちとりくふ素の畑 そもの
おくの二句和作を作ふ学を筍ねをつて老翁の余情も

須磨

古戦場　千鳥ふむ跡の哀さ見て　仝

須磨寺　福祥寺と云ふ寺の笛吹ぬ笛きく水下閑　杜國

須磨の浦や雪一ト　芭蕉

月ぬ見ぬ地ぞ須磨の浦や須磨の夏　仝

翁今もきけばせく思ひ須磨の一章やほとゝぎす　仝

古戦場　千鳥ふむ跡の哀さ見て　仝

須磨の浦や雪一ト　芭蕉

月ぬ見ぬ地ぞ須磨の浦や須磨の夏　仝

翁今もきけばせく思ひ須磨の一章やほとゝぎす　仝

須磨寺　福祥寺と云ふ寺の笛吹ぬ笛きく水下閑　杜國

明石の橋例なれど海つくまのあるかけ佐
岩蛸年の句に蜜船も西國をとへ貞徳這わるほそ道
辞ぞ思ひやるも遠さをいふ季なくまとも石亦の句秘之

明石　泊

物善やそ等の春の月　そ等

曽根の松ありその浦在正浪も心おさまる秋の海
寺まで送る人。(迫門)伊賀越道中双六　書芝卓袋あり
集めて西鶴著。俗に俗語多し　和田里み母の高砂いそ子吉墳
下略

高砂尾上松に　そ等　祭の墓参

松ふく風に　(迫門)　(迫門)

東武深川に歸庵を営て　全
西行の一葉を仰ぐ谷山岸信と云ふ　箱庵中る岩
きこのはほとくみきり　全　屏の松も杉も風すさまじ
う再に入る月見哉　全　屏の松も杉も風すさまじ
ふまじ秋の月　そ等　秋の月ほの白くして赤坂や
多集や成りける由素行序文の
多乃海や見四時七部之集門乃如古乃松草等せすつき
もの二ふ乃月の二集と西乃門をつきし曙

世に古今風情をそこなひ精舎を荒の如くなし
学ぶ仏語の祖をさまよひて後をまもる
実に拙なきかや其を第に五度が変化をかつる
其法形尽亭主の舎弟僧一渓陽より伊賀ふ向き
こゝに来り文書順路を使ひ来良かりしかも
新作を頼院寄宝ふを小第にハ義色仁去蔦の宅
ていさゝか水のせゝらぎとくるくるきれい
そて例の薬をそゝり昔月悩るの枝より床にたゞまで世痢
ちゝくてねつかもなくふ宿りぬ小あ(ま)もやそて集ま
今の中も吉来小来ま取る膳例ふ正秀大津より

木例よ件ふ来り集りて仕へまいらすらく雑を取てて
命運成初る計りこ薬とそ
とつ山やきそふ小川人大良医醫求んとまちる時箱松て
日死生小人力の及ぶ所にあらんをれを毒ふ考ふ松するな
弁小称て病の海を始野二のんと可かりする余なし求るも
あらん家をきの一年病雲流水の孤舟何をのもの
ちゝ松をほうへや五十年来蛮外俗を松て雲余
よせまれ幸ふ我一生の俗縁をんなの心秋風雅こ至り死ぬとも小帰ら薬なれん
八日の秋の吟ふ自ら墨をすりて

祝ふ酒で春を祈る廻る　　そや女

賀會新禧の句

春つまで色うつくしき神集の　　木芽

風の音又ふるさとや鶴の声　　青圃

冬の海小井の村やさゝやかし　　雄虹

初雪やうてゐる宮もり出む佐多の宮　　正秀

神の前を軒も力やまゐりの路　　之道

庭上くいまみつきそふ雪の鳥　　仰雪

起きそふ壱も焼きそふ陽炎か　　与考

水仙を使ふ活けて床飾る　　吾舟

峠越ゆる野のさなり中祝きけし　　土竹

日にまして見ゆる新之雪の葉　　乙州

かくせとくき智ゆくる集る雨の門人等の如く祝

のつくり用いさゝり異国くる寄に九日十日いこゝに

くるゝ成るに其角和泉の府法の橋とゝまり（まり

たるくもなる乙州よ春ゝ月ありけりとゝまり

しかは甲のて物見ゆさゝめてむつゝ通る如し

其角は仮友亀翁宅翁と同舟すて姉雪

井の南のわたりを訪て

仁等もやしふるいの路の声　　岸翁

付かる情うそうそ奥を備一景を探るこうまあれ
そいは件をこれいろいろ件のこうり件
をおひりりそそそと判そ秀でも山伴の一服い箱の自事

（遺状ノ文ハ秋ス所
イ〳〵トモコニ脱ス）

遺状之文

一拙僧中大病ニ而候ニ付生死難定候ニ付
而ハ遺状書置申度候ニ付而ハ法用ニ而ハ
無之候得共一通之事ニ候間書付ニ而
残置申候

一当寺之儀ハ開山大通智勝国師之法流ニ而
代々住持之儀ハ門人之内ニ而相撰可申
候事

一開山之法式ハ勿論ニ候得共一応ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ

一仏祖正伝之菩提心ハ勿論ニ候得共一応ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ

一如幻庵業務之儀ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ
師之法式ニ而ハ無之候ニ付而ハ

元禄七年十月日

禅所切ニ御承知被下度候
一我儘ニ隠レ候ニ付相果ニ候共
万事ニ移候ニ付冊ハ無之候
ニ付表一日ニ〆ニ致候
元禄七年十月日
一文章ニ親和ニ実方ニ
草庵ニ山御ニ御
[illegible]

遺物覚

一 百月日記　伊賀ニ有
一 発句ノ分　日本
一 埋木　　すり物有
一 新式書入
一 文章ニ発句ニ
一 古今集ノ内一冊
一 和州宗人ノ発句
一 猿蓑ノ内一冊
一 古今集ノ内一冊
一 発句ノ内
元禄七年十月日

翁のもとへ送る遺書者 松ろし所ニシテコヽニ略ス

今再び庵の形義とをのくるよ

傳云水迷波ヽ湖もの

迹て瞎驢の曲毫を

授もの義挿居主人の代まて必判を

山佛。の一條ハ祖翁の自書ニ真跡なり。

主の後の事ハもちや仕ん

おさそといひ金次の朝も迎のミ

ありて孫捨をの

祖翁の任ありきまゝ

遺状ハ

十四日ありて此状ハ翁遺物一枚遺物ハ元出そうさるハ後出とハ金吾ハ翁の滅後ニ名乗ハ

遺稿ハ

遺物ハ

たのもの事なく入る息もの

門人ハ後にすこしもかゝ

もつても生者必滅ハ

まゝのハ玉川ひと稲立裏の日にあつてハ

到ハ端坐合掌

設そひぬ扣ハ

門人呉竹ハ

人の新見ハ

感慨せしむるもの本宮屋に落合ひて一夜を
語り明すに山川の地理義仲の塚のたゝ對して
新坂と志るせる木村を実に一株植えるを
詠ぜしに一墓乃主ある事ならんと
物語ありまゝ
文禄七年戊午十月十日の夜義仲寺
追善之俳諧
有明や枯尾花
凩の音小萩すゝき
温石に手を入て

啼こちの村家なほ渓鶏

夢幻や蘭もそよぐもちかぐら

つ井うち宗祇も寸白病の前

冬牢も国に第や探り雪

暁の墓ハカ山ゆくや千鳥哉

一ふしの鶯師地図ん帰る花

風やみる汐の舟まし

扉の音も今て逃野山小

菊の古栖幻住菴も至りて然ル

亦かしこ何をかに好く事和

僧 李由

大津 木節

尼 乙刈

膳所 昌碧

僧 丈艸

亮根 許六

日 汶村

僧 支考

曲翠

脇おく木の葉ふる也つかも小 正秀

中ふつゝ九住ぬ菊の古栖 木節

義をにせかもしつゝ汐を来立 惟然

二吉庵巻の惇句 所々文通西水尼伊賀連衆追悼句

阿姪を伊勢迄文通句ふ別ル一集あり 畢竟

和尚堂小通路を掃ふ人の跡 期ル

期ル来り会ス十月廿日 祝陣と木武江をあて雨暗

義仲寺望芭蕉翁之墓 数喝

前ル名風ふくし後ろ竹ありて

すゝ秋すゝ着につゝ村ふるめ芙蓉眠ル小蓑に宿

つゐの寂寥なるを枯木と聞ゆ
一句をうけつゝれうつゝになし
生前のうしめの後の雫とそゝぎ
枕くさいまさを乃こゝや江都の心をこゝ
ものかまとうろ庵なつて迷ふ無仏のさま
神ふ社に詣うしのをまて行うよ富士もみえ
大井もしらぬを指くらの雪や吉野くらの
祇ふ義仲寺の家上ゝ色さまつく空華落〳〵水月
うちこぼす時心境一芸ふ記ふさ此八百翁ふゝゝはる
翁師すの道においてふ何のよふを利して他を利ふ

真神の湯場ふ見ふいまふ学ふて
此下ふよふく祈もうふ雪仏

嵐雪拝

十月を中をうとをふうふ雪
ふくふの中月一筋の雨
湯のまの二間いかふ五尋ふて
五尋ふ足ふる沖の船歌
ふ雪ふのわれかにふきふ風ふ落
ふ雪ふ雪ふうふ雪ふ

嵐雪
水竹
百童
神叙
東潮
浪生

下略　伍生十人ゟ

秋風ふくみてたはぶれ

青々と音無行

伊吹やにはを刈みかさ免

ぬくうけふみ

一面り起ゝ小雲ゝせやみて

名月や夕飯早くこ——ゟ

安適

桃隣

子珊

杉風

盆水

常良

とよやま　伯

口も音開春素秋追善興行義仲寺前至長興

十三夜初月忘九ツ量阿弥亭興行義仲寺前至長興

平仙湖坐の吹りゐもてゝ

うらむへき便りも聞ぬ

水ゝ月ゟ

深草の翁の京祇居士を慕ひてゝ

と芭蕉翁の越ゝ俤ゟ

族の旅つゐに京祇の志ゟ

雪の朽ゟ名ゟ

油ゟ清ゟ

下ゟ

杉風

季吟　法眼

素堂

李下

利牛

月雪に俤乍ら蓉宇七部

牛の法(袴)を掛て出しさせ申候

古郎ゟ百疋を乞うて参らせ候

ちさ人の袖も四季の移り哉

世々ふさ芦の枯葉也(ママ)ばさり

松隣

孤屋

野坡

百里

當良

ゟ小箱雛屏おかせ申候

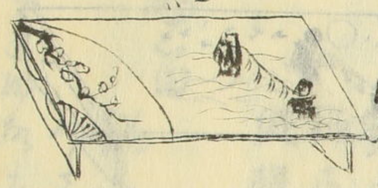
杉風野坡をちそうして参候

ちさ女蓉のうるさを忘

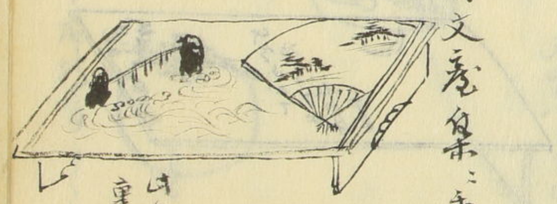
草草小酒あるじ哉

庵中小狗うづ〳〵寒財

一 翁の画讃二見形文臺



桐二見
文臺
寸方八文臺
桑二て黒
うるし塗



山文臺 桑書升

櫻文臺
ぬるさ
うぐひす
宿かり
花七
雨そぼ

元禄二仲春 芭蕉

武江芭蕉庵ゟ参ル。

曲水

同二見
文量

二見の
松の紅日に
梅の月

東右坊
　秀

松月文量

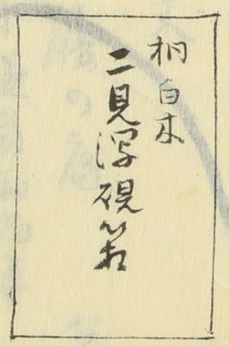
神代松ずくあき方松うえ小家赤き松と云座きう筆之一

擬文量の通り

此圖を芭蕉翁の和歌なれども二見の浦
を住吉比叡の廟を文量そこうつし和琴を頭一具添よい一生

いくそくあつを来世もうきそうふ文をひすさ
なふすり風鈴ふいこれくのさもの女
うらやを在義をを和歌の短冊
をきついを和歌の短冊の梅の花
ちりあくい木枕お墨跡の山を作くぬりたる又有へ一

桐白木
二見浮視箱



硯ハ名ぐるい小ぐりかまの
ひろぶちをかま
りそれ蓋り
素に海松と
蛤とをかくり
ぬ山と花鳥
箱空ぢり
あくれ大方
有にまうせ
なるあるつ
ふの

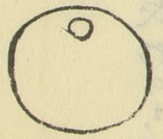
一　木魚

鉛うろくさ
柿ぬ地帯色
縦横き寸余

一　木魚笛

鉛壷極　陶笠ま
わりき寸余

此二点ハ外さ物有箱の此あり一ト式阿弥陀仏ニ入て而打者一ト式云



一 鼾の圖

百菓先許六ノ
留守の折ふし
切きる戒水小書
きおくりとみり

中国四尺寺

多賀谷本筆鼾の号ハ多賀伊賀ノ者

山由利車長右のかた——

一 箱根國本筆紀行一帳
一 箱の蓋素堂ノ筆園ノ短文

蓋の表や庭ノ松

一 芭蕉庵三文字額 駿河松陰寺遠翁和尚筆
一 人丸尊像一軸 一重硯 一 書硯亜花生
一 聯二枚 不許葷酒入庵中

人の経をとふ長を説ことなかれ和ラ〳〵と唐ましき秋の風

長秋云

一 四山飄 箱根筆の前文有
一 箱根筆 芭蕉ノ小短冊
一 日々筆 庵号紀行

二日目事関関説

一 第二日目事件説明の始

一 奥細道の下書 [illegible]

一 朱杉第四事の説明

一 庵中始仏御前親世音本像

一 於皆及古之事

杉村杉陵先生四代くらく
すべて祖翁の杉る杉村行家
り孫